シンデレラ　～本の世界～

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンデレラ　～本の世界～

【Ｎコード】

Ｎ３３６６Ｅ

【作者名】

ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】

シンデレラが大好きな中学生・佐崎光里（ささきひかり）。ある日、本屋でシンデレラの絵本を見つけ、買いたいけど高いっ。とゆーわけで棚に戻そうとした瞬間、本が急に光り出し光里は本に吸い込まれていったー・・・。

Cinderella1

「あったぁ♪」

私は棚から1冊の本を取り出す。

それは・・・。

「シンデレラの本？」

私の目の前に出てきたのは私の彼氏・祐(ゆう)だ。

1週間ほど前に祐(ゆう)に告白され、付き合っている。

今はそのデート中なのだ。

「うん」

「好きなのか？」

「うん♪」

私はシンデレラの本を抱きしめる。

私は子供の頃、一番初めに読んだ絵本はシンデレラなのだ。

それから私はこの本が好きになったの。

「買ってやろうか？」

「へ？」

私は目を丸くする。

買って・・・くれるの？！

ホントは嬉しい。でも・・・。

「別にいいよっ」

「遠慮すんなって！」

でも・・・３０００円だよ？

ってか、高すぎっ！！

この頃色々値上がりしてるしなぁ。

しょうがないか。

「そうか。それじゃぁ帰ろうぜ」

「うん」

私が本を棚に戻そうとした時、本が急に光り出した。

・・・なっなに？！

私は本の中に吸い込まれた。

「ん・・・っ」

私は目を覚ました。

よく見ると、私は見覚えのない野原に倒れていた。

「ココ・・・どこ？」

私・・・本屋にいたよね？

なんで野原にいるの？

ってか祐(ゆう)は？

私は辺りをキョロキョロと見渡す。

「あら？」

私の耳に入った女性の声。

それは・・・。

Cinderella2

「まさか・・・シンデレラ・・・？」

私の目の前には私の大好きなディズニープリンセス・シンデレラがいる。

「ええ。そうよ・・・？」

シンデレラはにっこりと笑う。

やっぱり美人～～♪

私はうっとりとシンデレラを見る。

「ど・・・どうしたの？」

「へ？いやっ！なんもない・・・です」

私はシンデレラの声で我に戻る。

なんとなく敬語。

「そう。あなた・・・変わった格好してるけどどこから来たの？」

ギクッ。

この場合・・・どう言ったらいいの？

“未来から来た”？

“本から来た”？

もう～～！！どうしたらいいのぉ？？

私は頭を抱える。

そんな私を見てシンデレラはクスクス笑う。

「うふふっ。あなたおもしろいわね。まぁ・・・旅人かしら？」

旅人・・・。

そうか！旅人って言えばバレないじゃんっ！

「そ・・・そうなの」

私は戸惑いながら言う。

「やっぱり～。お名前は？」

「私、光里（ひかり）です」

「光里（ひかり）さん。よろしくね」

シンデレラは右手を差し出す。

これって・・・握手？

「はいっ」

私も右手を差し出し、握手する。

あったかい・・・。

「ねぇ光里(ひかり)さん」

シンデレラは私の右手を離しながら私に問いかける。

「はい？」

「旅人なら・・・住むところとか・・・あるの？」

住むとこ・・・家かぁ。

そいや帰り方分かんないし・・・。

「ない・・・です」

「じゃぁ、私のお家にいらっしゃい」

「え！いいんですか？！」

「ええ。ついて来て」

私はシンデレラの後を歩く。

やったぁ♪

シンデレラの家に行けるんだぁ♪

本の世界に来てよかったぁ♪♪♪

Cinderella3

私とシンデレラは山の中へと入ってゆく。

こんなところに家なんかあるのかな・・・？

「ココよ」

シンデレラの前に建っているのは、りっぱな城のような家だ。

「すごーい」

私は感動した。

シンデレラに会え、家まで見れるなんて夢にも思わなかったからだ。

これは・・・夢・・・じゃ、ないよね？

「そう？普通の家よ」

シンデレラは軽く笑う。

やっぱキレイ。

「シンデレラ？どこ？」

・・・ん？この声は・・・・。

「あ。お姉様だわ」

・・・ゲッ！！

お姉さんと言ったらあの意地悪な人じゃない！

私あのキャラ嫌いなのよね～。

バンッ！

家の扉が思いっきり開いた。

開けたのは・・・お姉さんだ。

「お姉・・・様」

「ココにいたの？早く洗濯を・・・。誰？」

お姉さんは私に気づいたようだ。

「わ・・・私！光里（ひかり）です」

「そう。シンデレラ！早くしてちょーだいよ」

「はい・・・」

お姉さんはドアを閉めた。

・・・何なの？！

あの言い方！！
もっと優しくしてもいーじゃない！
だから嫌いなのよ！！！！

「光里(ひかり)さん・・・」
「ん？」
「ごめんなさいね。いつもこうなのよ・・・」

シンデレラは俯いている。
その顔はきっと寂しい顔をしてるんだろう。

「ううん。いいの！シンデレラは悪くないよ」
「・・・ありがとう」

シンデレラはニコッと笑う。
よかった。

シンデレラに笑顔が戻って。

Cinderella4

「ところでシンデレラ、舞踏会って知ってる？」

これから起こる事を聞いてみた。

「舞踏会・・・？あぁ、お姉様達が今夜行くわ」

今夜？！

もうそんな時間なの？

「シンデレラは・・・行かないの？」

「・・・」

シンデレラは黙り込んで俯いている。

「・・・ドレスが・・・ないのよ・・・」

「ドレスなんて・・・っ。ドレスなんて関係ないわよ！そんなのなくたってシンデレラは綺麗だし・・・」

シンデレラは顔をあげた。

「こんなボロイ布キレきた女の子なんて笑いものよ」

シンデレラの瞳から一粒の涙がこぼれた。

シンデレラ・・・。

そうよね。

私がシンデレラの立場なら・・・きっとそう思うに決まってるわ。

「ごめんなさい」

「いいのよ。まぁ・・・光里(ひかり)さんの言ったことは正しいと思うわ」

シンデレラはニコッと笑う。

でも・・・その笑顔はさっきとは違う。

無理に笑ってるよね?

私は・・・シンデレラにそんな顔をさせるために聞いたんじゃないよ。

夜。

とうとう夜になった。

今宵は舞踏会。

村（？）の女性達が集まって来る。

シンデレラのお姉さん達も準備をしている。

「シンデレラ！靴はどこ？」

「シンデレラ！リボン知らなーい？」

「シンデレラ！ネックレスどこにあるの？」

「はぁい！ただいま！！」

お姉さん達はシンデレラをこき使う。

なんなのよ？！

そんなにキレイにしよったってね！

美人にはなれないのよ！！

お姉さん達は準備を全て整え、家を出ようとしている。

「シンデレラ！家のことは・・・よろしくね」

お姉さん達はそう言い残して出て行った。

・・・。

家の中には私とシンデレラの二人。

しーんとしている。

「シ・・・」「光里（ひかり）さん」

私とシンデレラの声が重なる。

「何？」

「私の代わりに・・・舞踏会に行って来てくれない？」

「・・・え?!」

どうゆう・・・事?!

Cinderella5

「なんで・・・？」

「だって、あなたのその服装結構いいし」

「そんなの！シンデレラが行かなきゃ意味ないですよッ！！」

そうだよ・・・。

この物語はシンデレラが舞踏会に行くんだから。

私が行ったって意味ないよ・・・。

「王子様にこんな格好で会うなんて恥ずかしいわ」

「もしかしてシンデレラ。王子様のこと・・・」

「ええ。好きよ」

うそぉん?！

つか、会ってんの?！

「私ね買い物行った時、一度だけ王子様を見たの。その姿はりりし

くてカッコよかったの」

待てよ。

それって・・・。

「一目惚れ？」

ってこと？

そう聞くと、シンデレラは顔を赤く染めた。

シンデレラは黙ってうなずく。

ふふっ。可愛いい♪

私は軽く笑う。

「もう！・・・光里(ひかり)さんは好きな人いないの？」

「え？んー・・・。彼氏はいます」

「そうなの？！いいなー・・・。私も王子様と恋人になれたらいいのになぁ・・・」

シンデレラは空を見上げる。

そっか・・・。

そんなに好きなんだね。

「・・・よし！！私がシンデレラをキレイにしてあげる♪」

「どうやって？」

どうやってって・・・。

・・・何も考えてなかった・・・。

私は適当にそこら辺にあった木の棒を手に取る。

「ビビデバビデブー！！」

私は木の棒をブンッと振り、呪文を唱えた。

シーン。

・・・何も起こらない。

やっぱり・・・ダメ？

「きゃぁ？！」

シンデレラの叫び声が聞こえた。

私はシンデレラを見た。

すると、シンデレラの体は光っていた。

Cinderella6

え?!何?!何で光ってんの?!

私は、シンデレラの体が光っている理由が分からなかった。

パッ。

シンデレラの姿が変わった。

それと同時に光がやんだ。

よく見ると、シンデレラは水色のドレスを着、ガラスの靴を履いている。

月の光でドレスがキラキラ光っている。

「きれ～い♪」

「なんで・・・こんな・・・っ」

シンデレラはとても驚いている。

「まぁいーじゃん♪舞踏会！行っておいでよ」

「でも・・・歩いて行ったら間に合わない・・・」

そっかぁ・・・。

ならば！

「ビビデバビデブー！」

私はまた木の棒を振り、近くにいた動物に向けて呪文を唱える。

すると、動物が馬車に変わった。

「まぁ♪」

「さ！行っておいでよ」

「ありがとう光里(ひかり)さん♪」

シンデレラが馬車に乗り込む。

「シンデレラ！鐘が鳴る前に戻ってきてよ！」

「わかった」

馬車は城に向って走って行ってしまった。

・・・これからどうしよう・・・。

つか、どうやったら戻れるの？！

グ〜。

腹の虫が鳴く。

・・・お腹すいたぁ。

今日何も食べてない〜。

もうやることないし、舞踏会でも見に行くか。

でも・・・。

”歩いて行ったら間に合わない・・・”

って言ってたよね・・・。

ならば！！

「ビビデバビデブー！」

私はまたまた木の棒を振り、近くにいた動物に向って呪文を唱えた。

すると、動物は乗馬に変わった。

おっしゃ～！！

「いざ！舞踏会へ！！！！」

私は城へ向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3366e/

シンデレラ　～本の世界～

2010年10月11日16時56分発行